



がっかりする。けれど、そのうちの一人が子どもを哀れんで拾い、育てることになるのだ。貧しい者のもとに、天からもたらされた無垢なるみどり児。星の光とともにきたった赤子は、まるで救世主のように映るのだが、キリストとは正反対に、この子は恐ろしい悪魔の性癖を發揮していく。星のように美しく育った子どもは、村の子どもたちを扇動しては弱い者・醜い者・不具を、徹底していじめるのである。あげくに、実の母親であるという女乞食を罵声とともに追いやってしまうのだが、このとき、異変が起こる。星の子は突如蟊蛙のように醜くなって、今度は自分が追いやった母親を訪ねて歩かねばならなくなるのである。星の子は、行くさきさきでいじめられる。自分がかつて醜い者たちにしたと同じ仕打ちが、次から次と星の子に浴びせられる。そればかりか、とある町に入るとすぐに魔術師にとらわれ、白と黄と紅の金を探してくるように命じられる。そんなよるべない星の子を助けてくれるのは、星の子に一度助けられたという子兎である。子兎のおかげで三度とも金を探し当てられたものの、星の子は癩病やみに請われると、魔術師の仕打ちも顧みず、その金をあげてしまう。もはや、魔術師に命を奪われるしかなかったとき、星の子はきれいな姿に生まれ変わり、人びとの歓呼の声に包まれて王子として迎えられるのである。それでもなお、みずからの罪を悔いて旅立とうとする星の子の前に、女乞食と癩病やみとが現れ、お妃と王に変身をとげる。こうして、星の子はほんとうの両親である王と妃のもとで、情け深く国を治めたという。



うに……。それが星なら、あるいはそのまま許されたかもしれない。けれど、地上に降り立った星の子は、その無垢の場からとびだして苦い経験を積み重ねていかなくは、一人の人間とはならないのだ。厳しい試練という経験を経て、星の子は美しさをとりもたず。けれど、それはもちろん以前の美とは異なる。ワイルドは「これまでなかったもの」を、星の子の瞳に宿らせている。「これまでなかったもの」はおそらく、様々な経験を経た後に得られる、より高くて貴い美の輝きであろう。自己愛を拭い去った後、自己以外のすべてのものに注がれる愛の光でもあろうか。私達はここでようやく、一人の人間の完成された姿に出会うのである。

この話の展開は、「無垢」から「経験」を経て、「より高貴な無垢」へとというワイルドの思想を表しているともとれるが、私には、私達の文化圏にはなじみの薄い西洋的な人間の成長が説かれているように感じられる。私達の文化においては、これほど徹底して孤独な試練が、話の上とはいえ、課せられることがあるだろうか。第一、無垢なる美しい捨子のなかに、それゆえの残酷性を告発することなどできるだろうか。どうももつと甘やかで穏やかな筋だてを期待してしまいそうである。けれど、そんな私の期待を受け付けなければ、星の子の話は、さらに恐ろしくも悲しい結末でくくられている。星の子は王子と違って治世して三年後に亡くなり、しかも後継者は悪政をしたと結ばれているのである。子ども向けに書き直された『星の子』では、さすがにこの結末は省かれている。けれ

